



ワシントンとアルカポネと今日のヒーロー

物語でも、音楽でも、絵画でも、あらゆる作品には「主題」が存在します。主題とは、簡単に言えば作者がその作品を通じて伝えたいメッセージのことです。

この主題を教える時は、基本的に次のように指導することが多いです。まず、次の話をします。

アメリカの片田舎にワシントンという少年が住んでいました。ある日、ワシントンは、お父さんがとても大切にしていた桜の枝を折ってしまいました。そこへ、お父さんが帰ってきました。

ワシントンはどうしようか考えました。けれど、お父さんに自分が切ってしまったことを正直に話し、謝ることにしました。

お父さんは、「お前が正直に謝ったことは、千本の桜の木より値打ちがある」と言って、ワシントンを褒めてあげました。

「ワシントンの桜の木」という話です。

このお話は、どんなメッセージを伝えたい話なのでしょうか、と問うと、次のような意見が出てきます。

「正直に生きることに価値がある。」

「間違ったことをした時は謝ることが大切だ。」

「ウソはよくない。」

その上で、次のように伝えます。

このように作者が作品を通して読者に伝えたいことを、**主題**といいます。

先のお話から導かれる主題は、「桜の木を折るな」ということではもちろんありません。

正直に自分の過ちを認めたワシントン（のちのアメリカ合衆国初代大統領）

の生き方に学ぼう、という話です。

そうした見えざるメッセージの存在を学んだ上で、「ごんぎつね」や「大造じいさんとガン」や「やまなし」などの主題を考えていくということです。

主題については別の機会に詳しく紹介することにして、今回はこのワシントンの逸話について考えてみます。

実は、この桜の木の話以外にもワシントンには逸話が残っています。

次の話です。

初代アメリカ大統領ジョージワシントンは子どもの頃は大変ないたずらっ子でした。悪口を言ったり、物を壊したり、暴力をふるったり、、、

ある日、父はジョージを台所の柱の前に呼んで「今からおまえが悪いことをする度に、1本ずつ釘を打っていく。良いことをしたら1本ずつ抜いていってあげよう。」と告げました。しかし、毎日悪いことをするので柱の釘は増え続け、たちまちハリネズミのようになってしまいました。

しばらくしたある日、ジョージは柱の前で考えました。「やっぱりこのままじゃだめだな。よし、良い事やってみよう。」それからジョージは次々と良いことをするようになりました。その度に釘は抜かれていき、とうとう全部の釘が抜かれるときがきました。ジョージは大喜びし、釘が全部抜かれた柱を見上げました。その時、父はジョージに言いました。

「ジョージよ、おまえは本当によく頑張った。いい子になったね。でも、柱をよく見てごらん。」ジョージははっとしました。「いいかい。釘は無くなったが、打たれた後の穴はそのまま無数に残っているだろう。後で謝ることはできるけど、一度傷つけた相手の心は傷ついたままなんだ。だから決して人を傷つけてはいけないんだよ。」、、、、

ジョージはその後、人の心を大切にし、立派な大統領になりました。

柱に残った釘の穴。

考えさせられるものがあります。

自分の行った過ち。

頭を下げ、謝罪をし、許してもらえることもあるかもしれませんが。

しかし、その傷やダメージは、頑としてそこに残るのです。

この逸話について、以前高学年を担当している時に次のような内容を書いたことがあります。抜粋で紹介します。

少し、視点を変えてみよう。

先の、桜の木の話。

仮に、ワシントンのしたことがお父さんにバレなかったとする。

何かの動物の仕業かもしれない。

近所の子どもたちが遊んで折ってしまったのかもしれない。

そんな風に、お父さんが勘違いした場合のことを考えてみる。

これは、ワシントンにとって「良いこと」なのか。

バレなければセーフなのか。

しめしめと、笑っていて良いことなのか。

断じて、否である。

過ちを犯したことは、誰にもバレていないと思っているかもしれない。

隠れてやったことだから分からないだろうと思っているのかもしれない。

けれど、過ちを犯した瞬間を、2人の人は必ず見ている。

その「2人」とはだれか。

一人目は、自分である。

自分のした行いを、自分の目は確実に見ている。

そういう行いをしてしまったということは、確実にその人の心に暗い影を落とすとしていくだろう。

そしてもう一人は、「神様」である。

日本人は昔から言った。

「お天道様が見ているよ。」と。

神様もお天道様も、きちんとあなたのしたことを見ている。

良いことも、悪いことも。

何百年も前から、先人が言い伝えてきた言葉がある。

「因果応報」。

自分のしたことは、そのまま自分にはね返ってくるという意味の言葉だ。

こんなお話がある。

アル・カポネと言えば、アメリカのマフィアのドン。

たくさんのお金を犯罪でおかしてきた。

彼は最終的に警察に捕まった時に、こう言った。

「俺は、アメリカのために一生懸命働いてきたんだ。その俺をなぜ逮捕する。俺は何も悪いことはしていない。」

こんなアル・カポネも、はじめから悪い人だったわけではない。

子どもの頃は、みんなと同じよい子だったはずである。

たぶん子どもの頃にちょっとした失敗をしたのだろう。
誰かに嫌がらせをしたり、いたずらをして周りの人を困らせたり、隠れて悪いことをやってみたり。

アル・カポネはその時、きっとドキドキしたと思う。

「ばれたら、たくさん怒られる。」と考えたはずだ。

しかし結局、アル・カポネは、うそをついてバレない経験を積んでしまい、実際に起きたことを正直に言わなかった。

この時、カポネの心の中に、少し悪い心が芽生えた。

「悪いことをしても、黙っていればわからない。」

だから、その後も人のものを盗んだり、人を傷つけたり、悪いことをたくさんしてしまった。

そして、そのたびに嘘をついた。

そのうち、カポネはだんだん悪いことをすることが平気になってきた。

最後には、自分のしていることが悪いことかどうかわからなくなってしまい、人を殺したり、たくさんの人を傷つけたりしたにもかかわらず「俺は悪いことは何にもしていない。」と言うような人間になってしまった。

過ちを犯し、バレない経験をしてしまった時。

最も自分にとってマイナスなのは、悪いことを「悪い」と感じる心を失っていくことなのだと思う。

教師は、警察ではありません。

ですから、悪しきをくじいてばかりでは、指導はうまくいかなることが往々にしておきます。

子どもたちとの関係が冷え切り、場合によっては大きく崩れていくからです。

「お目こぼし」という言葉があるように、時には子どもたちの嘘やごまかしに付き合っただけの許容が求められる場合があります。

モグラたたきのように、すべてのもめ事や諍いを片っ端から指導していても、うまくいくどころか逆効果になるケースがあるということです。

一方で、あまりにも目に余る行いをしている場合には、厳しく指導をおこなわなくてはならない場合も当然あります。

ただ罰すればいいわけではない。

かといって、甘くし過ぎていてもチームの秩序は守れない。

この辺りのさじ加減が非常に難しいのが、教育という営みの特徴です。

昨日の昼、掃除を担当してくださっている佐藤さんと坂田さんから次の報告がありました。

1年生が使っているフロアの多目的トイレに、小便が広範囲にまかっていたという報告でした。

この話を受けて、どのような指導をするのかを考えました。

以前からも伝えている通り、トイレの使い方については過去にも複数回指導を行ってきたところです。

そこに今回の一件ですから、状況が全く改善されていないために強く指導しなくてはならないと思う方もいるかもしれません。

このような、センセーショナルなことが起きた時、人はついこの場面だけを切り取って全体を見てしまいがちになるため、往々にして指導の仕方を間違ってしまう事があります。

今回の件、恐らくは誰かがふざけ半分でやってしまったことなのでしょう。

一方で、2階のトイレの使い方（特に男子トイレ）については、ここ数力月の間はかなり改善が生まれてきたという手ごたえも私は感じていました。

ですから、先の佐藤さんと坂田さんに尋ねてみたのです。

先月や今月の男子トイレの使用状況はどうでしたか、と。

すると、お二人は、次のように話してくださいました。

「ゴミも落ちていることも少なくなったし、先生に報告しなくちゃいけないくらいの汚れ方をしていることもほとんどなくて、とてもよくなったと思います。」と。

こうした全体像を把握しておかないと、適切な指導はできません。

多くの子は、以前より使い方をよくしていこうとしている中で、誰かが不意に起こしてしまった今回の件だとした時に、全体に対して「トイレの使い方が相変わらずよくありません」と指導することは不適切だということです。

そこで、次のように指導することにしました。

まず、多目的トイレは当面の間使用禁止になることを伝えました。

今回のような一件があったのですから、それは仕方のない措置です。

一方で、先の坂田さんや佐藤さんが伝えてくれた、トイレの使用状況の改善の話もきちんと伝えました。

以前よりも使い方がよくなってきたということを、坂田さんと佐藤さんが言ってくれているんだよということを伝えたわけです。

そして、一生懸命除菌や掃除をして下さっているお二人の写真を見せながら次のようにも伝えました。



坂田さんも佐藤さんも、大変な仕事なのに文句ひとつ言わずにこうやって毎日掃除をしてくれています。

それどころか、トイレの使い方が以前よりも良くなったということも、なんとこの件が起きた後にも伝えてくれたんです。

以前よりも、使い方は確かに良くなってきているのは間違いないのだろうと思うし、それができる人が増えてきたことも素晴らしいことだと思っています。

だからこそ、今回のように、誰か一人がしたことでも目的トイレが禁止になるのはとても残念なことです。でもこれは仕方ありません。

つまり、「多くの1年生がちゃんとトイレを使えている」では足りなくて、「1年生全員がちゃんとトイレを使えている」状態になることが目標だということです。

坂田さんや佐藤さんが褒めて下さっているようなトイレの使い方を、1年生全体に、みんなに広げていきましょう。

子どもたちは、真剣な表情で「ハイ！」と返事をしていました。

すると今日のうちに、いくつか私の所に報告が入るようになりました。

そのすべてが、トイレの使い方をよくしていこうとする友達の姿を報告してくれるものでした。

自分一人ではなく、みんなでトイレを正しく使えるようにしていこうとする向きが広がっていることを感じ、私は非常に嬉しく思いました。

中でも取り分け印象的だったのは、6時間目に1組で道徳をした時のことです。

ある男の子が、「先生、ちょっと話したいことがあるんだけど」と授業の終わりにやってきたのでした。

耳を傾けると、どうも別のクラスの子が今日トイレを失敗してしまったようで（小便をこぼしてしまったようで）、それを見たまた別のクラスの男の子がそれを片付けるのを手伝ってあげていたという話でした。

なんてカッコいい姿なのだろうと感動するとともに、そうした友達の素晴らしい行いをクラスが違ってもちゃんと見ていて伝えに来てくれることにも驚いたのです。

その報告を近くで聞いていた子たちも

「すごい！」

「〇〇くんカッコいい！！」

「ヒーローみたい！」

と声を上げ、盛大な拍手が起きた瞬間でした。

そうやって、使い方を良くしようとしている大多数の子たちのことを見ずに、力の指導に走らないで本当に良かったと思った瞬間でした。

先にも書いた通り、教師は警察ではないので、できていない時にまるで取り締まりかのように指導するのではなく、しっかりできている子や頑張っている子たちを称えながら、望ましい方向に全体を導いていきたいと思っています。

アルカポネの話、ワシントンの話、そして友達を助けていた今日のヒーローの話、どこかで折に触れてご家庭でも話していただければ幸いです。（渡辺道治）

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](https://www.google.com)